

41352

教科書文庫

4
810
31-1905
20000 15413

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

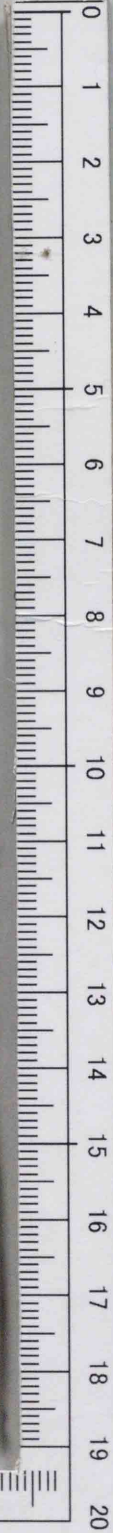
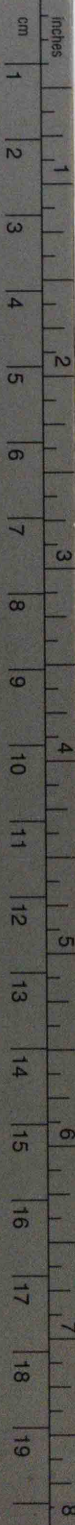


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
31-1905
2000015413

文部省著作

尋常小學讀本 五

發賣所
株式會社
國定教科書共同販賣所



教科書文庫
4
810
31-1905
2000015413

資料室

375.9
M014



文部省著作

尋常小學讀本 五

發賣所
株式會社
國定教科書共同販賣所

広島大学図書
2000015413



松島

11
10

青島大書局印

杉 前



だいい わたくしの家。

むかふに、高い杉の木が見えませう。あそこ

に、わたくしの家があります。

家の前には、さくらの木とも

もの木とがあります。さくら

の木は、もうつぼみが大き

なておます。

わたくしの家には、おとうさ

もくろく。

だいい	わたくしの家。	一
だいい	のあそび。	三
ダイ三	水ノ夕ヒ。(一)	六
ダイ四	水ノ夕ヒ。(二)	八
だいい	むぎ。	十一
だいい	ひばり。	十四
ダイ七	番。	十八
だいい	たうろ。	二十一
ダイ九	ツユ。	二十二
ダイ十	水ノコーヨー。	二十七
だいい	汽車のたび。(一)	二十八
だいい	汽車のたび。(二)	三十二

ダイ十三	ウミバタ。	三十六
ダイ十四	カウモリ。	三十九
だいい	夕立。	四十三
だいい	雷のおちた話。	四十五
ダイ十七	軍艦。	五十
ダイ十八	黄海ノ戦。	五十二
だいい	秋の野原。	五十五
だいい	山の上のみはらし。	五十九
ダイ二十一	太郎ノ町。	六十三
だいい	大水。	六十五
ダイ二十三	材木。	七十二

青島大書局
15413
図書

妹

二
んとおかあさんとがおいでです。おちいさんも、おばあさんもおいでです。また、おはなといふ妹もゐます。

ゆふはんは、うちのものが、みんなそろって、たべます。ゆふはんがすむと、わたくしは、がっ学校こいで、ならしたことのお話をします。そのあとで、おばあさんが、いろいろ、おもしろいお話をしてくださいます。

話

わたくしの、いちばん、すきなところ、は、がっ学校こいとわたくしの家とです。

だい二のあそび。

かぜが、だんだん、あたたかになつてきて、木もめをだしました。草もみどりになつてきました。野原には、たんぽぽやすみれなどが、いちめに、さきそろつてゐます。空では、ひばりがさつづつてゐますし、林では、うぐひすがない

野原



いま、みんなが、おもしろさうに、しよーかをう
たっておます。

春がきた。 春がきた。

ておます。ちよーちよは、花から

花へ、まっしておます。

おはなとおちよとがつみく

さをしておますと、太郎も、文

吉も、あそびに、きました。

どこに、きた。

山に、來た。 野に、來た。 さとに、來た。

花がさく。 花がさく。

どこに、さく。

山に、さく。 野に、さく。 さとに、さく。

鳥がなく。 鳥がなく。

どこで、なく。

山で、なく。 野で、なく。 さとで、なく。

ダイ三 水ノタビ。(一)

ワタクシハ水ノヒトシヅクデス。ハジメハ、
山ノ土ノ中ニ、キマシタガ、クラクテ、タイソ
一、コマリマシタ。ソコデ、ナカマトイッショニナッ
テ、土ノソトヘ、デマシタ。スルト、ダンダン、ナ
カマガフエテキテ、山ト山トノアヒダノ谷
ニ、オリマシタ。

谷ニ、オリテカラ、マモナク、ガケノ上ニ、デマ



シタ。ワタクシドモ
ハ、ソノガケカラ、ト
ビオリマシタ。ワタ

クシドモノトビオリルノヲ、人ハ、瀧タキトイヒ
マス。

ソレカラ、スコシ、イクト、ミチガ平ニナリマ
シタ。ミチノリョーカハニハ、イロイロノ草ガ
ハエテキマシタ。日ハ、キラキラト、ワタクシ

平

谷

魚

休

左右

ドモノ上ニ、テッテ、魚ハ、ウレシサウニ、ワタクシドモノ中デ、アソンデ、キマシタ。ワタクシドモハ、オモシロクテ、ヨルモ、ヒルモ、休マズニ、アルキマシタ。ワタクシドモノアルイテ、キルノヲ、人ハ、川トイヒマス。

ダイ四 水ノタビ。(二)

ワタクシドモガ、田ヤ、ハタケノアヒダヲトホッテイキマス。ト、右カラモ、左カラモ、ナカマ

町

馬

ガヨッテキマシタ。ワタクシドモノミチモ、ダン、ヒロクナッテ、上ニハ、橋シトイフモノガカケテアリマシタ。

ワタクシドモハ、イケバイクホド、ナカマガフエテ、マモナク、町ノ中ニ、ハイリマシタ。ワタクシドモノミチノリヨーカハニハ、リッパナ家ガナランデ、キマシタ。マタ、上ニハ、テツノ橋シヤ石ノ橋シガカケテアッテ、人ヤ馬ヤ車ガ、イ

舟

ソガシサウニ、トホッテキマシタ。
ソレカラ、スコシ、タッテ、ワタクシドモノ上ニ、
オモイモノガノリマシタ。「ナニカ」トオモツタ
ラ、フネトイフモノデシタ。舟ニハ、ニモツガ、
タクサン、ツンデアリマシタ。マタ、人モ、オホ
ゼイ、ノッテキテ、カイトイフモノデ、ワタクシ
ドモヲカキマシタ。
ソレカラ、マタ、スコシ、タッテ、ワタクシドモノハ、

海

タイソー、ヒロイトコロニ、デマシタ。ココニ
ハ、ミトホスコトノデキンホド、ナカマガ、オ
ホゼイ、ヨッテキマシタ。コノヒロイトコロニ、
ナカマガ、オホゼイ、ヨッテキルノヲ、人ハ、海ト
イヒマス。

だい五 むぎ。

文吉は、むぎばたけのそばで、おとうさんと、
話をしておます。

「おとうさん。この畑では、むぎがもう、ほを

出しておますのに、あの畑で

は、まだ、ほを出しておません。

この麥とあの麥とはちがひ

ますか。」

「おまへは、よく、きがつきまし

た。これは大麥といつて、早く、ほを出して、早

く、みのるものです。また、あれは小麥といつ



て、大麥よりは、おそく、ほを出して、おそく、

みのるものです。」

「それでは、ごは

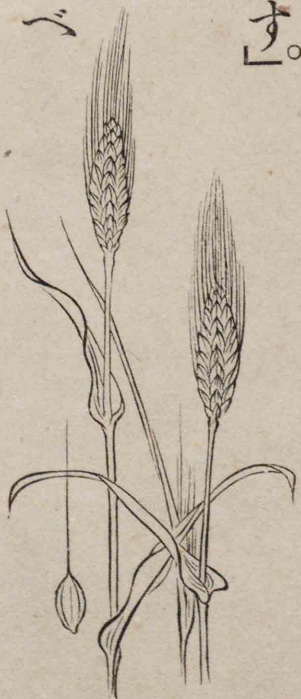
んにいれて、たべ

るのはどちらですか。」

「それは大麥です。小麥のほは、ひいて、こ

なににして、うどんやそーめんをこしらへ

たり、または、ぱんをこしらへたりします。

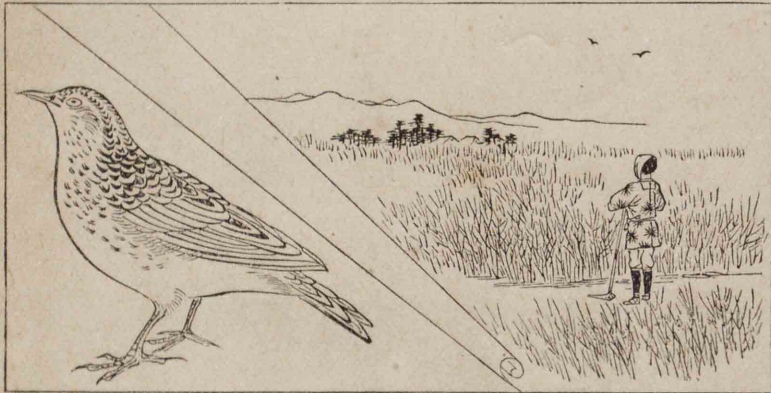


おまへは、人がなつかぶるむぎ麥藁あら帽子ぼうしは、な
んで、こしらへたのだから、しておますか。
「いえ。知りません。」

「あれは、大麥、小麥、または、はだか麥といふ
ものなどのくきをあんで、こしらへたの
です。」

だい六 ひばりと人。

ひばりが、麥畑に、すをこしらへておきました。



ある日、おやどりが、急をさがしに、出るとき、
ひよこに、「よくきをつけて、
すをなさい。」といひました。
まもなく、人がきて、「麥が、よく、
みのつた。もう、からねばならん。」
と、いつて、かへりました。
ひよこは、しんぱいして、おや
どりがかへると、この話をし

ました。おやどりは「なに。しんばいせんでも、よい。」といひました。

次
次の日、おやどりのるすに、また、きのふの人
が来ました。そして、「あした、となりの人にた
のんで、かってもらはう。」といつて、かへりました。
ひよこは、おやどりがかへると、また、すぐこ
のこを話しました。おやどりは、また「なに。
まだ、さう、しんばいせんでも、よい。」といひま

した。

その次の日、また、まへの人が来ました。そし
て、「人にたのんだのではだめだ。あしたは、じ
ぶんで、からう。」といつて、かへりました。

ひよこが、おやどりに、このことを話します
と、おやどりは「それでは、もう、かうしては、を
られん。あしたは、きつと、かるにちがひない。」と
いって、ひよこをつれて、すをたちました。

虫 指 蚕

ひとは、じふんでするきにならんと、どのよ
しなしごとともできるものではありません。

ダイセ カヒコ 蚕

カヒコハ、桑ノハヲタベテ、大キクナル虫デ
ス。ハジメハ、小サナ虫デスガ、大キクナルト、
ミナサンノ手ノ指グラキニナリマス。

蚕ノ小サナトキニハ、人が桑ノハヲ、キツテ、ヤ
リマスガ、大キクナルト、キラズニ、ヤツタリ、枝

ニツイタママデ、ヤツタリシマス。



サウナルト、人が蚕ヲマブシニウツシマス。

蚕ハ、ダイテイ、二十五日カ
ラ四十日グラキノアヒダ、
桑ノハヲタベテ、ソノアヒ
ダニ、四ド、ネムリマス。ソシ
テ、モウ、タベンヨ一ニナルト、
カラダガスキトホッテキマス。

卵

サウスルト、蚕ハ、口カラ、糸ヲ出シテ、スヲカ
ケマス。コノスヲ繭マユトイヒマス。

蚕ハ、コノ繭マユノ中デ、サナギトイフモノニナ
リマス。ソシテ、マタ、ガトイフモノニナッテ、繭マユ
ヲヤブツテ、出マス。ガハ、タイソー、チョーチョニニ
テキマス。

コノガヲ、紙ノ上ニ、ハナシテオクト、卵ヲ、紙
ニ、ウミツケマス。コノ紙ヲタネガミトイヒ

マス。コノタネガミノ卵ガカヘルト、マタ、小
サナ虫ニナルノデス。

蚕ノ繭マユカラハ、人ガ糸ヲトリマス。コノ糸ヲ
生糸キイトトイヒマス。生糸キイトヲネルト、練糸ネリイトニナリ
マス。生糸キイトハ、ワガ國クニニ、タクサン、デキマス。

だいハ たうゑ。

いまは、いそがし、

たうゑどき。

ここでは、馬に

田をすかせ、

苗

天氣

梅

そこでは、苗を、田に、うゑる。

すかせる。うゑる。いそがしや。

これから、たびたび、田草とり。

しだいに、てかすが、ふえていく。

どうぞ、あきまで、つごーよく、

天氣もつづけ。雨もふれ。

ダイ九 ツユ。

梅ノミガキイロクナルコロニハ、マイトシ、

晝 夜

雨がフリツツク。雨ノフルノハ、トコロドコロデ、スコシツツ、チガフガ、タイテイ、六月ノナカバカラ七月ノハジメマデ、二十^ハ日^カアマリ、ツツク。コノコロヲツユトイフ。

コノコロハ、晝モ、日ノヒカリヲ見ルコトガスクナク、夜モ、月ノヒカリヲ見ルコトガスクナイ。ニハニハ、コケガハエルシ、キモノヤハキモノナドニハ、カビガハエル。

病氣

フリツヅイタ雨が、モウ、フランヨーニナル
ト、ツユガアガッタ。トイフ。ツユガアガルト、キ
ーニ、アツクナル。コノトキニ、ヨク、キヲツケ
ント、病氣ニナル。

けふ、せんせいから、ききまし
たら、あなたは、このごろ、ご病
氣ださうでございませが、ご
よーすはいかがでございま

すか。このごろは、雨がふって、た
いそし、こころもちがわるい
ときでございますから、どう
ぞ、おだいじになさいませ。

六月十一日

たけ

おちよさま

きのふは、お手紙をください
まして、ありがたうございま

す。おたくしの病氣はもう、す
かりなほりましたから、あし
たから、が、こーに、まゐるつも
りでございます。どうぞ、ごあ
んしんをされてくださいま
せ。

六月十二日

ちよ

おたけさま

飲 死

ダイ十 水ノコーヨー。

水ハ水車ヲマハシタリ、舟ヲウカセタリ、イネ稻
ヲソダテタリスル。草木ハコレヲスヒ、人ハ
コレヲ飲ム。水ガナクナルト、草木ハカレテ
シマヒ、人ハ死ンデシマフ。

重

マダ、コノホカニモ、ダイジナコトガアル。テ
ツビンデ、水ヲワカスト、ジョーキトイフモノ
ガデキテ、フタヲフキアゲル。アノ、重イフタ

汽車

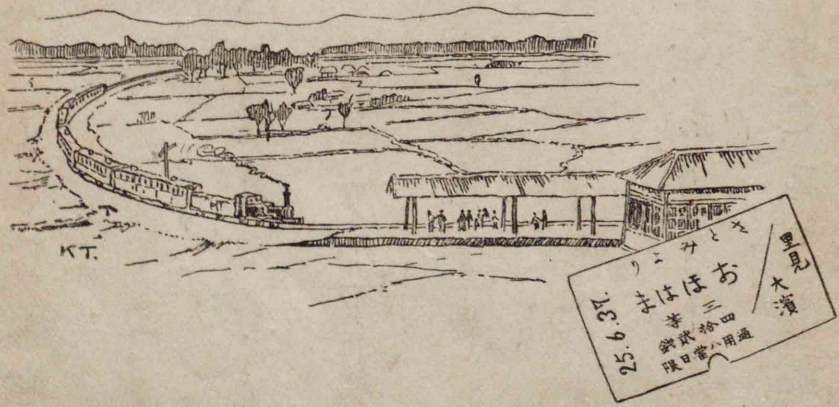
ヲフキアゲルジョーキガ、タイソー、ヤクニタ
ツノデアル。汽車モ、汽船モ、軍艦モ、ミンナ、コ
ノジョーキノカデウゴクノデアル。
コノジョーキトイッテモ、モトハ、水デアル。汽車
モ、汽船モ、軍艦モ、水ガナクナルト、ジョーキガ
キレテ、トマッテシマフ。

だい十一 汽車のたび。(一)

小太郎は、おとうさんと、停車場にいきました

行

た。ふたりは、これから、をば
さんのところへ、行くので
す。
停車場では、もう、人が、おほ
ぜい、切符を、かっ、て、おま、した。
ふたりも、切符を、かっ、て、まっ、て
おま、した。
まもなく、汽車が、けむりを



來

出して、むかふから來ました。はじめは、機關きかん車しゃばかり見えまして。

小太郎は、汽車が、あまり早く來るから、「おとうさん。汽車は、ここで、とまりませうか。」とたづねました。おとうさんは「とまります。」といひました。そのうちに、汽車が着きました。この停車場ていじやばで、人が、おほぜい、おりました。入りかへて、また、おほぜい、のりこみました。

着

動

ふたりものりこみました。すると、きてききてきがなつて、汽車が動きだしました。

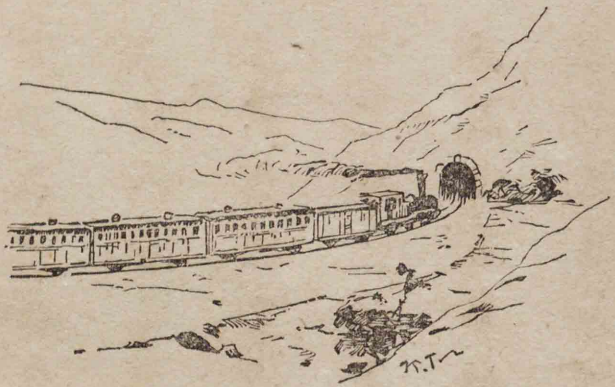
後

小太郎は、おもしろがって、まどの中から、ぞとを見ておきました。汽車は、だんだん、早くなつてきて、山も、川も、林も、後のほーへ、とんで行くよーに、見えまして。たんぼで、はたらいておる人も、みちをあるいておる人も、馬も、車も、見えたかとおもふと、すぐ、後になつてしまひ

ました。

だい十二 汽車のたび。(二)

ふたりののりこんだ汽車は、村をとほったり、たんぼをとほったりして、きゅうに、まぐらなところには、いりました。小太郎はびっくりしましたが、すぐ、あかるいところに、出ました。小太郎は「おとうさん、いまのはなんですか」とたづねました。おとうさんは「いまのは、とん



ねるといって、山をほりぬいたところですよ。」とをしへました。汽車は、まもなく、つぎの停車場（しやば）に、着きました。ここでも、人が、おほぜい、おりたり、のったりしました。

汽車は、また、ここを出て、いくつかの停車場（しやば）をとほって、行きました。そのうちに、鐵橋（てつきょう）をと

音

ほって、かみなりのよーな音をさせました。しばらくすると、むかふに、海が見えて、汽車は、松林の中にはいりました。松林を出ると、海はたの停車場ていしゃばに、着きました。ふたりは、この停車場ていしゃばで、おりました。小太郎のをばさんの家は、この停車場ていしゃばのきんじよにあるのです。

小太郎は、をばさんの家から、おかあさんの

ところへ、手紙をあげました。

わたくしは、午前十時につきました。をばさんのうちでは、どなたもおかはりがありません。せん。あしたは、三郎さんと海はたへ、あそびに、まおります。

六月二十五日

小太郎

母上様

母様

午前
時

ダイ十三 ウミバタ。

沖
ココハウミバタデリョーシノ家が、タクサン、
タツテキル。ドノ家ニモ、アミガ
ホシテアル。沖ニハ、舟ガタクサ
ン、見エテキル。ウミバタデ、沖ノ
方ヲ見ナガラ、話ヲシテキルノ
ハ小太郎ト三郎トデアル。
小太郎「三郎サン。ムカフノ舟ハ魚



夕方

ヲトツテキルノデスカ。」
三郎「サウデス。魚ヲトツテキルノデス。夕方ニ
ナルト、ドノ舟モ、ソノ魚ヲノセテ、カヘツテキ
マス。」
小太郎「ソレカラズツト、ムカフノ方ニ、ケムリヲ
出シテキルフネガアリマス。アレハ軍艦ズンカン
デスカ。」

汽船

三郎「イーエ。アレハ汽船デス。キミハ、コレマ

デニ、汽船ヲ見タコトガアリマスカ。」

小太郎「イーエ。見タコトハアリマセン。」

三郎「ソレデハ、アノ岡ニ、ノボツテ、見マセウ。高

イトコロノ方ガ、ヨク、見エマス。」

小太郎「ソレデハ、アソコマデ、カケクラベヲシ

ヨウデハアリマセンカ。」

三郎「シマセウ。サ。一、二、三。」

フタリハ、岡ノ方へ、カケテイッタ。



ダイ十四 カウモリ。

カウモリハ、夏ノ夕方、ヨク、ソトヲトンデキ
ルカラ、ミナサンハ見タコトガアリマセウ。

ソノトキ、ミナサンハ「鳥ダ。」トオ

モヒマシタデセウガ、アレハ鳥

デハアリマセン。頭モ、カラダモ

ネズミニニテキルケモノデス。

シカシ、ホカノケモノトハチガッ

テ、ウスイ、ゴムノヨーナ羽ヲモツテキマスカ
ラ、アノヨーニ、トブコトガデキルノデス。
カウモリニツイテ、次ノヨーナ、オモシロイ
話ガアリマス。

ムカシ、鳥ノナカマト、ケモノノナカマトガ
オホゲンカヲシタコトガアリマシタ。

ソノトキ、カウモリハ「ジブンハ、鳥デモ、ケモ
ノデモナイカラ、ドチラニモツカン。」トイッテ

キマシタ。

トコロガ、ハジメニハ、ケモノガカチサウニ
ナリマシタ。スルト、カウモリハ「ジブンハ、カ
ラダガネズミニニテキルカラ、ケモノノナ
カマダ。」トイッテ、ケモノノ方ニツキマシタ。
ソノウチニ、鳥ガカチサウニナリマシタ。ス
ルト、カウモリハ、また「ジブンハ、羽ガアルカ
ラ、鳥ノナカマダ。」トイッテ、鳥ノ方ニツキマシ

夕。

トコロガ、マモナク、鳥ノナカマモ、ケモノノ
ナカマモツカレテシマツテ、ナカナホリヲシ
マシタ。ソシテ、カウモリヲニクンデ、ナカマ
ハヅレニシマシタ。ソレデ、カウモリハ、コノ
トキカラ、晝ハトビマハルコトガデキンヨ
ーニナリマシタ。

コノ話ハ「フタゴコロヲモツテハナラン。」トイ

フコトヲヲシヘタツクリバナシデス。

だい十五 夕立^{ゆふだち}。

見るまに、くもる 青い空。

ぴかぴかひかる いなびかり。

なりだすかみなり、

ごろごろごろ。」

またなるひかる、 そのうちに、

木のはをうって、 屋根^{やね}うって、

光

ふりだすおほあめ、

ばらばらばら。」

つづいて、光る。

なる。光る。

雨は、だんだん、

ひどくなる。

のきばのあまだれ、

ぽちぽちぽち。」

やがて、雨やみ、

空はれて、

いつか、日が出て、

にじが出て、

學校

草木に、しづくが、

きらきらきら。」

だい十六 雷かみなりのおちた話。

ある村に、友吉ともきちといふ子と、和助わすけといふ子と

がありました。友吉ともきちは、學校で、先生せんせいのいふこ

とを、いつも、よく、氣をつけて、ききました。が、

和助わすけは、いたづらをしたり、おきみをしたり

して、よくは、ききませんでした。

雲

ある日、このふたりが、學校から、いっしょに、かへつてきますと、にはかに、雲が出て、雷かみなりが、ひどく、なりだしました。雨も、ひどく、ふつてきました。和助わすけは、おどろいて、みちばたの、高い木の下に、にげこみました。友吉ともきちは

先生

「このあひだ、先生が、雷かみなりのなるときには、どんなことがあっても、高い木の下などに、いてはならん。」とおっしゃったではないか。早く、來

たまへ。」

と、いつて、そこをのかせようとしました。

和助わすけは

「ぼくはそんなことをきいたことはない。と、いつて、なかなか、ききませんでした。友吉ともきちは「それは、きみが、ききおとしたのだらう。早く、來たまへ。」

と、いつて、手をひっぱって、むりに、そこから、つれて

きました。

和助が木の下を出て、まだあまりとほくも、行かん時のことでありました、目もくらむよーないなびかりがするといっしょに、耳もさけるよーな、おそろしい音がしました。ふたりは、おもはず耳に手をあてて、そこにたふれました。

時

あたりを見まはしましたら、さきの高い木は、雷がおちて、まっふたつに、さけてをりました。和助は、友吉のかたに、手をかけて、

「あー。あぶなかった。もし、きみがをらなんだら、ぼくは、雷にうたれて、死んでしまふのだった。」

といひました。

和助は、これから、友吉のよーに、よく、氣をつ

けて、先生のいふことをききました。そして、
わきみをしたたり、いたづらをしたたりするよ
うなことがないようになりました。

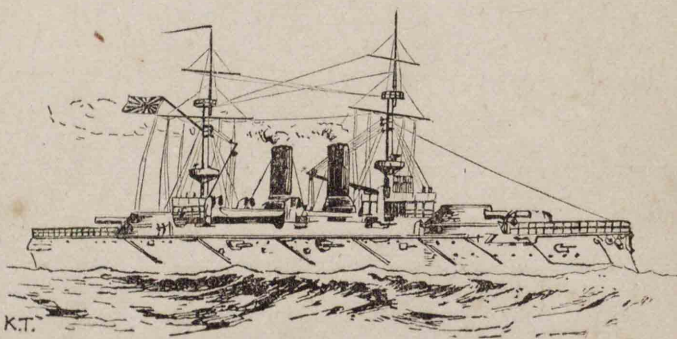
ダイ十七 軍艦

軍艦ハセンソーニツカフフネデタイソー、
ジョーブニ、コシラヘテアル。ヤハリ、汽車ノヨ
ーニ、ジョーキノカデ、動カス。

軍艦ハ、タイテイ、ソトガハガ、ハガネデ、ツツ

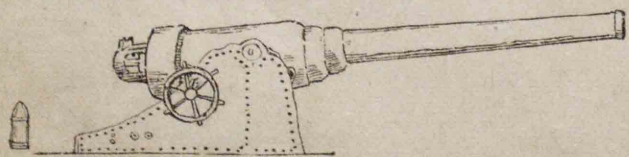
大砲

長



フ。マタ、大キナ大砲が見エテキル。ア
ノ大砲ハ長サガ、四十尺ホド、アツテ、口

ンデアツテ、大砲ガ、タクサン、ス
エツケテアル。
コレハ富士トイフ軍
艦ノエデアアル。ホバシ
ラニ、旗が見エテキル。
アノ旗ヲ軍艦旗トイ



ノサシワタシガ一尺アマリアル。
 二本ノエントツカラケムリノ出テキルヨ
 ースヤナミヲキツテススンデキルヨースハ、
 マコトニ、勇マシイデハナイカ。

ダイ十八 黄海ノ戦

明治二十七年九月十七日ノコトデアリマ
 シタ、ワガ國ノ軍艦松島吉野ヲハジメトシ
 テ、十二ソーノ軍艦ガナミヲキツテ、黄海ニ、ノ

海軍人

遠

リコミマシタ。ワガ海軍軍人ハ「テキ、清國ノ
 軍艦。ミツケタラ、ノガスモノカ。ウチシヅメ
 テヤラウ。」ト、勇ミタツテキマシタ。
 ソノトキ、チヨード、デアッタノガ、テイエン、チン
 エンヲハジメトシテ、テキノ軍艦十二ソー
 デアリマシタ。
 テキハ、アワテテ、遠クカラ、大砲ヲウチハジ
 メマシタガ、コチラハ、オチツキハラツテ、テキ



ニ近ヅキマシタ。「サー。ウテ。ト
 イフノデ、一ドニ、テキヲメガケ
 テ、ウチダシマシタ。テキモウツ。
 コチラモウツ。何千トイフカミ
 ナリガ、一ドニ、ナリダシタヨ
 デ、コイカイ黄海ハ、大砲ノケムリデ、ドコ
 モ、見エンヨ一ニナッテシマヒマ
 シタ。

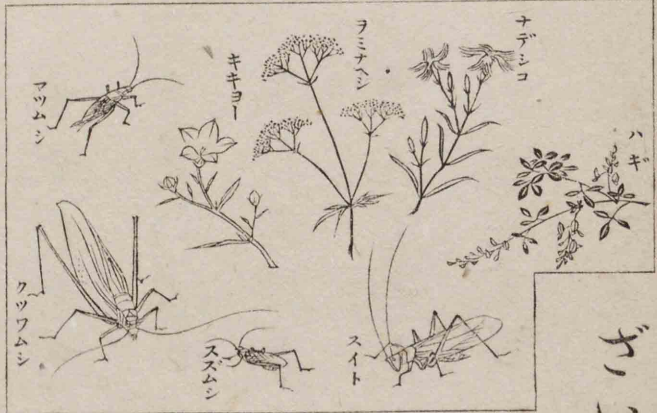
コノトホリテ、五時間ジカンホド、ウチアヒマシタ。
 ワガ海軍ハ、ト一ト一、テキノ軍艦グンカヲ、三ゾ一、
 ウチシヅメ、四ゾ一、ヤキマシタ。テキハ、オソ
 レテ、ニゲテシマヒマシタ。ワガ海軍ハ、カチ
 ドキヲアゲテ、メデタク、コイカイ黄海ヲヒキアゲマ
 シタ。コイカイ黄海ノ戦タカヒトイッテ、名高イノハコノコト
 デス。

たい十九 秋あきの野原。

ある日曜日におまつは、姉のおすすと、野原へ、あそびに行きました。

野原には、いろいろの花がさきそろておて、たいそ、きれいでございました。

「ねえさん、きれいでございますね。はぎもさいておます。ききよもさいておます。あれ、あそこには、赤い花ときいろい花とがさいておます。あれはなんといふ花でござ



「ございますか。」

「あの赤いのはなでしこといふ花で、きいろいのはをみなつしといふ花です。こは、晝も、こんな、いろいるな花がさいておて、きれいなところですが、夜も、いろいるな虫がいない、たいそ、おもしろいところですよ。」

「それはなんといふ虫がなくのでござい
ますか。」

「ずむし、まつむし、くつわむし、すいとな
どといふ、いろいろな虫がなくのです。す
ずむしはりんりん、まつむしはちんちろ
りん、くつわむしはがちゃがちゃ、すいとはす
い、ちよすい、ちよと、なきます。」

「ねえさん。それでは、いつか、おとうさんに

夜

つれてきていたただかうではございませ
んか。」

「あ。このごろは月夜ですから、あしたの
ばんにでも、つれてきていただきませう。」
ふたりは、しばらく、そこで、あそんで、うちに、
かへりました。

だい二十 山の上のみはらし。

山のふもとからみねの方まで、まがりまがっ

たこみちがあります。太郎と次郎とは、このこみちをとほって、のぼっていきます。ふたりは杉林の中をとほったり、大きな松の木の下に出たりして、山の中ほどに、着きました。

次郎「いさん。ぼくらの町が、すっかり見えません。あれが学校で、あれが郡役所ぐんやくしよです。ね。ぼくらの家はどれでせう。」



太郎「学校のよこに、火の見のはしごが見えませう。あれが警察署けいさつしよです。それから、一けんおいて、左に見えるのがぼくらの家です。」

次郎「あー。わかりました。うちの土藏どぞうの屋根やねも見えますね。」

遠方

太郎「さー。みねへのぼりませう。みねからは、遠方まで、よく見えます。」

ふたりは、しばらくたつて、みねに、着きました。すると、太郎の町も、となり村も、みんな、目の下に、見えました。町のうしろの氏神みぢがみの森は、ちよんぼりと、小さく、見えて、となり村との間の大きな川は、白いぬのをしいたよーに見えました。次郎は、はじめて、山のみねに、のぼ

間 森

りましたので、たいそー、よろこびました。ふたりは、しばらく、四方をながめて、また、もとのみちから、おりました。

ダイ二十一 太郎ノ町。

太郎ノトナリ村デハ、家が、トビトビニ、タツテ
キルガ、太郎ノ町デハ、家が、ノキヲナラベテ、
タツテキル。学校ト警察署ケイサツシヨトハ、町ノ中ホドニ、
アツテ、本ヲウル店マ、筆ヤ紙ヲウル店ハ、ソノ

筆

近クニ、アル。

マタ、呉服屋モ、セトモノ屋モ、小間物屋モ、荒物屋モアル。下駄屋ニハ、下駄ノカンバンガカケテアルシ、ローソク屋ニハ、ローソクノカンバンガカケテアル。カヂ屋デハ、朝早クカラ、ツチノ音ヲサセテキルシ、宿屋デハ、夜オソクマデ、客ヲマッテキル。晝ハ、キンジョノ村カラ、カヒモノニ、クル人が、タクサン、アル。馬

朝

客

通

ヤ車モ、タクサン、通ル。

だい二十二 大水。

四五日ほど雨がふりつづいた時のことでありました。ある朝、よあけごろに、「水だ。水だ。どてがきれた。にげよ。にげよ。」といふこゑがしました。どの家でも、としよりや子どもを助けて、岡に、たちのききました。太郎も、おぢいさんの手をひいて、岡の上に、たちのきまし

助

流

た。下の方を見ますと、もう田も、畑も、いちめに、水で、町はづれの家まで、水がおしよせておきました。わけて、きのどくなのはとなり村であつて、家も、何げんか、流れたといふことでありました。

午後

太郎は、たいそし、しんぱいしておりましたが、午後から、水が、だんだん、ひいていきました。そして、夕方には、みんな、じぶんの家にかへ

ることができました。

そのばん、太郎は、おぢいさんに、「どうして、こんな大水があるのでせうか。」とたづねました。そのとき、おぢいさんは、次のよーに、いひました。

「むかしは、ちかごろのよーには、大水がなかつた。それは、川上に、林がしげつてゐたからだ。林といふものは、大雨があつても、その水

上

をとめておいて、すこしづつ、流れ出るよーにするものだ。

それだのに、ちかごろは、むやみに、林の木をきるから、雨がふると、水が、一どに、流れ出すのだ。

それだから、林の木をきるにも、だんだんに、きつて、そのあとに、木の苗をうゑつけるがよい。さうしておきさへすれば、たいて

いの大雨では、田や畑の流れるよーなことはない。流れるよーなことがないばかりではなく、川の水のかれるよーなこともないのだ。それだから、川上の林は、だいに、して、むやみに、きつてはならん。

ききますれば、このあひだは、たいそーな大水で、水が、ついで、きんじよまで、ついたといふ

上申

こと。わたくしは、それをきいて、おどろきました。どんなに、おさわぎなさいましたでせう。どなた様にも、おけがなどはございませんでしたか。ちょっと、おみまひ申し上げます。

十月三日

森 一郎

川田三吉様

御安心

おみまひくださいまして、ありがとうございます。いちじは、ずいぶん、さわぎしましたが、まもなく、水がひきましたので、すこしも、けがなどはございませんでした。どうぞ、御安心なされてくださいませ。

十月四日

川田三吉

森 一郎様

ダイ二十三 材木ダイモク

材木

桐

材木ハ、林カラ、キリダシタモノデアアル。材木ニハ、松、杉、ヒノキ、ケヤキ、桐、栗クリナド、イロイロ、アル。
コノナカデ、イチバン、タクサン、ツカハレルノハ、松ト杉トデアアル。マタ、ヒンノヨイノハ、ヒノキデ、カタイノハケヤキデアアル。

柱板

箱

松、杉、ヒノキ、ケヤキハ板ニシタリ、柱ニシタリシテ、家ヲタテタリ、橋ハシヤ船フネヲコシラヘタルスル。杉ハ、コノホカ、電デン信シン柱バシラニシタリ、桶ヲケヤタルヲコシラヘタルスル。
桐ハ、カルクテ、ウツクシイカラ、机、本箱、ダンス、ゲタナドニ、ツカヒ、栗クリハ、カタクテ、ナガク、クサランカラ、家ノドダイヤ床ユカ板イタヤ鐵テツ道ドノマクラギナドニ、ツカフ。

サテ、コノ材木ヲキリダス人ヲソマトイフ。
 材木ヲヒイテ、板ナドニスル人ヲコビキト
 イフ。コノ材木ヤ板デ、家ヲタテルノが大工
 デ、タンス、机、本箱ナドヲコシラヘルノガサ
 シモノシデアル。

をはり。

明治三十六年九月七日 印刷
 明治三十六年九月九日 發行
 明治三十八年九月廿一日 翻刻印刷
 明治三十八年十月十五日 翻刻發行

著作權所有

著作兼發行 文部省

尋常小學讀本五
 定價金七錢五厘

翻刻者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 愛敬利世
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 博文館
東京市日本橋區本町三丁目八番地

明治三十三年十月三日
 文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
 株式會社 國定教科書共同販賣所

広島大学図書

2000015413

